

人、モノ、コトとの 出会いで実現していく夢

高松 真波 (高34回)

子育て真最中に英語教室開講

3人の子育てをしながら社会とのつながりを持ちたい
と思っ
て始めたのが英語教室でした。今年で開講28年目
になります。生徒40名から始めて、現在は小中高校生と
社会人を合わせて200名になりました。生徒一人ひと
りが私にとってかけがえのない存在なので、生徒数は増
えても1対1の交わりを大切にしながら、「英語で英語
を学ぶ教育」をずっと心掛けています。

私は高校3年の夏から1年間、アメリカにAFS交換
留学生として現地の高校に通いました。発音に気を付け
て一生懸命覚えたつもり
の英語でしたが、現地でのコ
ミュニケーションには大変苦労しました。日本での英語
の勉強は、現地の生活には役に立たなかったのです。こ
の経験から、「使える英語を伝授しなければ！」と思っ

ていました。高校生の私は、「思い切り身体を使って表現
したい」と自分自身に回答していました。

私の両親は教師でした。飯田下伊那で教師の子ですと、
教師の子らしくというか親の手前というか、自分の思い
のままに表現しにくいことがあった気がします。

高校生の私は、教師の娘として「バックダンサーにな
りたい」なんて思う事さえ忘れていただろうと最近気づ
きました。両親は私が3歳の時にピアノを習わせしてくれ
ました。小学校6年からは東京までレッスンに通わせても
らいましたが、12歳の私は自分にはピアノを専門にする
素質はないと悟ってしまいました。父は都内の音楽高校
への進学まで考えてくれましたが、私は父(高7回)の
母校である飯田高校に進学したいと言っ
て10年以上続け
たピアノをやめました。そして大学進学をめざしてどの
教科もまんべんなく勉強しました。英語は毎朝ラジオ講
座を聞いていましたが、ラジオ講座のスキットの内容や
挿絵には、釣りをしたりピクニックに行ったりする余暇
を楽しむものがありました。高校生の私は勉強が忙しく
て余暇という言葉さえ持てないのに、テキストの挿絵と
自分の現状とのゆとりの差は何だろうと思
いました。大
量の知識を詰め込む勉強は、ある面ではどの教科にもつ



●たかまつ・まなみ
旧姓・鈴木。高森中プラスバン
下部でフルートを、高校では語
学班で英語劇 Enoch Arden のヒ
ロインの少女時代を演じた。上
智大学外国語学部卒。クラシッ
クバレエを20年以上続けている。

て英語教室を開きました。「英語を話して世界中に友達
を作っ
て欲しい」という思いで英語を教えています。
夢は何ですか？

将来の夢は何かという質問は、日常会話の中のみなら
ず英語のテキストでも面接試験でも扱われます。当たり
前のように聞かれますが、実は子どもにとっては答える
のが難しいかもしれません。英語が問題なのではなく、
「夢が語れない」と黙ってしまふ生徒もいます。

さて、私自身はどんな夢をもっていたかと思
い返して
みました。小学校低学年くらいまでは、テレビで見るバ
ックダンサーをしてみ
たかった。当時めずらしい外人を見
かけて、外人とペラペラと話す自分を想像して
みた。

高校時代はひたすら寝たいと思
ったし、勉強ばかりし
ていた自分自身に、本当は何を
したいのかと問いかけて

ながりがあることが分かって楽しめ
ましたが、こんなこ
とを一生懸命暗記して何の役に立つ
のだろうと思
う面も
ありました。

そんな中で出会ったのがアメリカ留学です。そ
うだ、
外側から今の自分を見つめなおして
みよう！長野市で
筆記と英語の面接試験を通過後、代々木で2泊3日の合
宿のような試験がありました。留学生に選ばれてから渡
米までの間は、ちょうどAFS留学から帰国された加藤
喜久子さん(高31回)に留学体験談をお聞
きしたり、何
度もご自宅に伺って英会話の指導を
していただきま
した。小さい頃に外国人とペラペラと
話す自分を思い描
いた、その夢が
一歩近づきました。

私を変えたアメリカ留学

喜久子さんから、「アメリカ人は早口で何を言っ
てい
るか全然わからない」とお聞きして
いたので、米国到着
後に英語が通じない自分に驚きま
せんでした。7月半ば
から8月いっぱいホストファミリーと
アメリカの夏休
みをしっ
かり味わった後、9月から現地の
高校の3年生に
入りました。英語は1学年下のク
ラスにしてみ
てもらいま
したが、それでもさっぱりわかりま
せんでした。英語と米
国史でど
ん底を味わう分、数学と化学でい
い思いをして、

陶芸クラスとブラスバンドで息抜きをする感じでした。部活は体操クラブに入りましたが、オリンピック候補の選手の指導をするレベルの中で私は側転の練習をし、アメリカの食事でどんどん太って前転もお腹がつかえるくらいになりました。毎日各教科から出される宿題が大量のリーディングなのでクラブ活動後に読む気力も体力も無くなり、クラブは断念しました。体操のコーチはこんな私を1回、床運動に出場させてくれました。10点満点の48というスコアでした。

A F S生として、様々な団体の依頼で日本についてのスピーチをすることがよくありました。学校から帰宅後すぐにシャワーを浴びて振袖を来て、Momに会場まで



Luz (コロンビア)、Hugo (チリ)、Tina (ノルウェー) と私。皆、民族衣装で

車で送ってもらいました。ホストファミリーのアンダーソン家は、私を本当の家族のように受け入れてくれました。Dadはオレゴン州立大学の教授で昆虫学者でした。Momは児童文学の作家でした。ホストシスターのSusan

と一緒に高校に通い、妹のKarenは中学生でした。アンダーソン家にはだれも弾かないピアノがありました。「Manana弾いてー」と言われて素直に弾き始めると、家族中がピアノの周りに集まって来て喜んで聴いてくれました。長年続けたピアノを止める時、私は「人前でもう2度と弾かない」と自分への戒めのような決断をしていました。アンダーソン家で弾いた時、「喜んでもらえるなら人前で弾けばいいんだ」と思いました。A F Sの高校留学は、寄付と無償提供のホストファミリーに支えられている機関です。私はスウェーデンの留学生のTomasとピアノのデュオコンサートを開いて、A F Sへの寄付金を集めました。私達の練習のために、双方のホストファミリーが送迎したり会場を取ったりして支えてくれて実現しました。一度あきらめたピアノがこんな風に活かされて嬉しかったです。

週末には度々A F S留学生の交流会があり、この交わりで世界中に友達ができました。親元を離れて言語の違う世界でホストファミリーと暮らす体験には苦労もあり、それを共有できる留学仲間が大切な友達になりました。2018年には、当時の世界各地の友とオレゴン州での再会が叶いました。フェイスブックのおかげです。留学中は日本の家族との連絡は、往復に2週間以上かか

る手紙のみでしたのに。

私には、この高校留学の体験があったからこそ今の自分があるのだと思える貴重な一年でした。体験を通して「自分」を知る経験をしました。自分の変わっている点は、人と違っているから面白いと。

2年前に飯田

女子高校の「変な大人50人に出会う企画」の変な大人に選ばれて、高校留学に関して講演をさせていただきました。

した。Make a Differenceというタイトルで、様々な人、モノ、コトとの出会いで自分を変えられていくこと、そのためには勇気を出して出会うことを伝えました。



「かけがえのない出会い」を講演

芸能事務所に所属

還暦を迎えた私にはあらたな出会いがありました。芸能事務所のオーディションに合格して演技の勉強が始まったのです。毎週都内までレッスンに通っています。

事務所所属だと素人同然の私にも配役のオファーが来ますが、本来の仕事が忙しくてなかなか受けられません。必修で舞台や映像の芝居を学んでいますが、他にも時代劇所作のレッスンで江戸時代の文化や作法を学んだり、ミュージカル歌唱で発声の基礎や「語る歌い方」を習っています。高校時代にやりたいこととして思い描いた「身体全体を使った表現」です。バックダンサーの夢も近くなりました。何歳になってもいろんな人、モノ、コトとの出会いで変われるのだと実感しています。

オファアのひとつにGAPのモデルがあり、運良く選考に通ったので初めてランウェイを歩きました。歩き方やポージングの指導はなく、プロのモデルが歩くのを一回見せてもらって即開始でした。好きで続けているバレエのおかげでポーズは焦りも緊張もなく楽しくできました。



ランウェイ初体験。スポットライトの下は眩しかった

今の朝ドラは私の所属事務所が入っているのですが、エキストラでいいからこの撮影を見られるといいなと思っています。夢追いは続く！